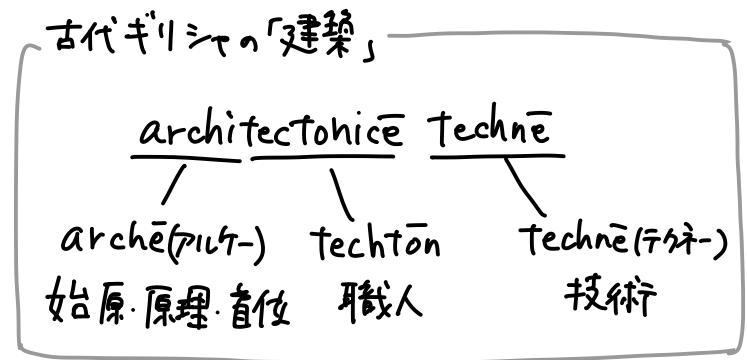


『隠喩としての建築』 柄谷行人 2011.16 木村

→ 建築論ではなく、あらゆる自律的な体系には外部があり、それだけでは完結できないという話。

★「制作」と「生成」



→ プラトン・アリストテレス 哲学 ⇄ 建築

制作… 自律した堅牢な秩序を築くこと。

生成… 多様で偶然的な自然による形成。

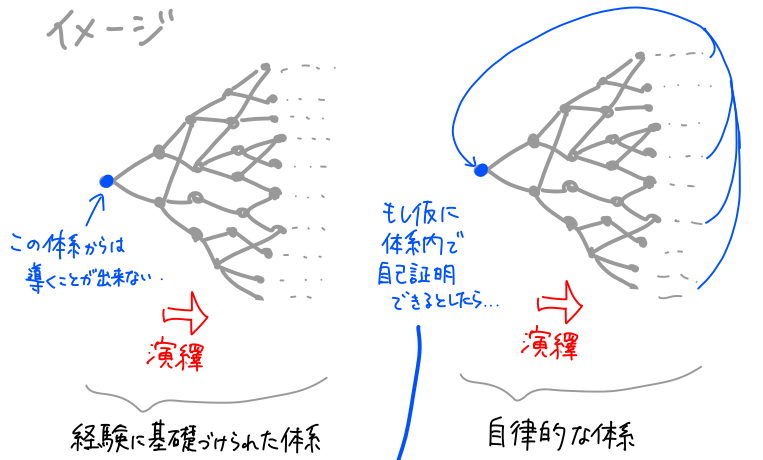
「隠喩としての建築とは、混沌とした過剰な『生成』に対して、もはや一切『自然』に負うことのない秩序や構造を確立することに他ならない。」 (11)

★「建築」の限界点

「十九世紀後半からの数学者の努力は、自然言語を排除することによって、完全な公理体系を建築することに向けられたが、それはゲーデルの『不完全性の定理』によってとどめをさされた。」 (11) 1930年

→ あらゆる(11) 数学的な体系には、その理論体系内では証明も反証も出来ないような閉論理式が存在する。

おまけ 感覚的基礎づけが必要。



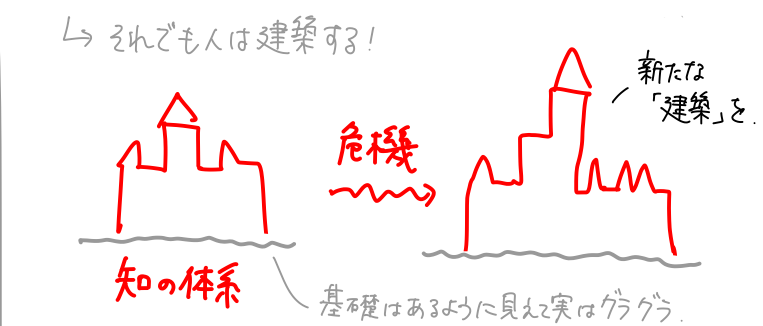
→ 自律した系は必ず自己言及的な回路を持つが、自己言及的な回路は必ず矛盾する、ということを証明したい。

セルフリフレックス

→ 実際の証明は理解できませんでした、またこれを乗り越える系の研究もあるそうなので、数学的体系はすべて矛盾ね、などと不用意に言わないように。

「諸科学の、そして数学そのものの発展を可能にしてきたのは、そのような厳密な建築性であるところか、あるあいまいさにほかならなかった。」 (12)

★「建築への意志」



→ 重要なのは、知の諸建築ではなく、
「たえず危機において更新する『建築への意志』にほかならない。」 (13)

→ 次なる秩序・構造を見出そうとする

↳ 「建築」は可能だという信念に支えられている。

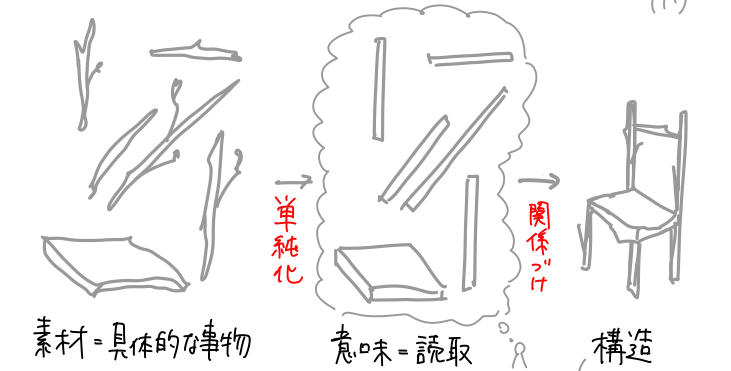
→ 建築たらしめることが、その限界を示してきた。

★人間の制作物の「構造」

「人間の作るものと自然が作るものとはどちらがうのか」 R. ヴァレリー (17)

↓

「人間によって作られたものの特徴は、その形態の構造が素材の構造より単純だという点にあると、ヴァレリーはいう。」 (19)



→ 「いかに複雑な構造が考えられ、
てもなお、それは『単純化』を伴っている」 (19)

(→ 単純化しない、対全体・対具体としてのコレスポンダンス (12))

「歴史的に考えるということは、... ある構造あるいはある建築が自立したのではなく、それがつねに任意の選択にほかならないことをみることなのだ。」 (22)

→ 「生成の多様性・偶然性を肯定することのできない弱者のデカダンス、あるいは合理主義への非合理的な逃避」 R. = チェ (11)

「ここでいう『自然』は、対象物のことではなく、人間による制作(建築)の限界点にあらわれる何かだからである。」 (23)

→ 「もっと重要なことは、われわれの問いが、われわれ自身の『説明』できない所与の『環境』のなかで与えられているのだということ、したがってそれは普遍でもなければ最終的でもないということを得ておくことである。」 (24)

★アレグザンダーの自然都市

「アレグザンダーは、より人間的で生きられる都市空間を作ろうとする他の多くのプランナーたちと、一つの点において決定的にちがっている。それは、彼が『自然都市』という多様体を数学的構造に、すなわち秩序に還元できると考えたことである。つまり、プランナーたちの建築的な企てを批判しているにもかかわらず、いわば『建築への意志』が最も徹底しているのは彼にいてである。」 (32)

「問題なのは、この『単純化』である。セミ・ラティスガツリーの重合であるということは、いいかえれば、われわれが考える『構造』はどんなに複雑なものであってもツリー化をもとにしているということである。」 (35)

→ 「要するに、ツリーだけでなく、セミ・ラティス構造もまた、ヴァレリーのいい方ではいば、『自然』がつくったもの、よりつねに単純なのである。」 (36)

「自然都市の構造は、『都市に住む主体』の意識においてしかありえない。そして、都市・建築の記号論は、交通信号・ニュースラックといった客観物をたんに示唆的な形式とみるところに成立するのであり、それはいわば『生きられる世界』の現象学的還元なのである。」 (37)

